



## あたらしい仲間(なかま)をしょうかいします。

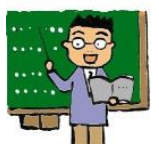


ミャンミンゾー  
(ミャンマー)

ニンユウエイ  
(ミャンマー)

### 中川先生のへんてこ日本語

149



約さんふん(3分)遅れて・・・

またまたJRの車掌さんの話で申し訳ないが、約さんふん(3分)遅れて〇〇駅を発車しております」というのを聞いて、「どこまで来たか」と愕然とした。

最近、「よんじゅうさんふん(43分)」などという日本人学生が多く、嘆かわしく思っていたが、ついに車掌さんまで汚染されたのかとガツカリした。

日本語教育では、「いっぶん、にぶん、さんぶん。よんぶん・・・」と指導しているが、日本語学習者の方が正しい日本語を使っていることになる。テレビなどで、第はちは(8波)と使っているのも気になる。「ほっぱ」というと、「発破」を連想させるためだろうか。それとも「ほちは」の方が聞き取りやすいためだろうか。

そう言えば、「9時58分発」は、「じゅうはちふん」と、以前からアナウンスされていたような気がする。正しさよりも、聞き取りやすさが優先されているのだろう。

日本語の助数詞は、対象物によって、本/枚/匹/冊など、使い分けなければならぬ。音も変化するので、かなり厄介である。「いっぶん、にぶん、さんぶん、よんぶん・・・」と、「1、2、3、4」に注意するように教えれば、「いっほん、さんほん、よんほん・・・」などとなり、もはや顔面真っ青である。「いちぶん、にぶん、さんぶん、よんぶん・・・」などと、使い手も楽だろうし、指導する側も手間が省ける。しかし厄介だからこそ、そこに日本語の美しさがあるのかもしれない。

京都外国語大学 日本語学科教授 中川良雄

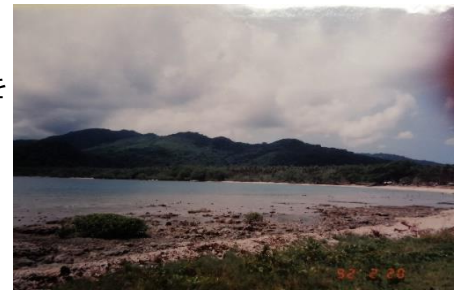
# 先生たちのリレーエッセイ 西垣 雅章さん

ヴァヌアツ共和国って知っていますか？

ヴァヌアツ共和国は南太平洋にある熱帯の諸島で、フィジー、ニューカレドニア、とソロモン諸島を結ぶ三角形の真ん中に位置する国です。現在のヴァヌアツの人口は約 31 万人で大津市の 34 万人よりちょっと少なめです。

私は平成 2 年(1990 年)10 月から 2 年間、青年海外協力隊員としてヴァヌアツに派遣されました。32 年前の人口は 15 万人でしたので、当時から 2 倍以上に人口が増えたこととなります。ヴァヌアツでは、首都のポートヴィラから 200 km 離れたマレクラ島にあるヴァヌアツ開発銀行の支店に派遣されました。支店と言っても支店長 1 人とタイピストの二人しかいない出張所のようなもので、住居も用意されていなかった赴任当初は途方に暮れたことを思い出します。(これは、青年海外協力隊“あるある”で、私の先輩隊員は、着任時に当初予定されていた赴任先が廃止されて無くなっており、先方の政府機関の担当者は、「そんなこと言われても、無くなったものは仕方が無い。」とぼっさり。協力隊の事務局に相談すると、「日本に帰国したいなら、してもいいよ。」とつれなく言われ、結局自分で赴任先を探し出し仕事をしていました。)

ここで、私が青年海外協力隊に応募した理由を少し説明します。私は大学を卒業し銀行に就職しましたが、ちょうどその頃はバブル経済の真ただ中で、業務の忙しさ以上に、不動産やゴルフ会員権、拳句の果てには傷害保険を金融商品に仕立てて融資をする営業活動の方針に疑問を持つようになりました。銀行員とは、社会を支えるモノ作りや商店等の産業に精通し融資をして世の中の人々を豊かにすることが役割であると、漠然と自分が思い描いていた理想と現実が随分かけ離れていることにだんだん気づくようになりました。そして、「社会や仕事とはこんなものだし、続けていけば、そこそいい給料を貰えるだろうから我慢して続けていく。」と自分の思いを抑えていくのか、或いは「本当に自分がしたかった事はこんなことではなかったのだから、やり直す方法を考えてもいいのではないか。」と初めて自分の内面に向き合う機会になりました。



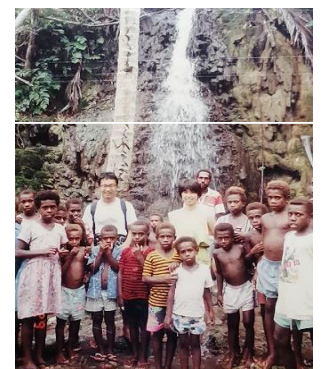
誰もいないビーチ

私は、子どもの頃から漠然と海外に行ってみたくて思っていました。大阪万博で、海外の人達やその雰囲気を感じ、家族で言ったアルバムをよく見返していました。私の母は、テレビ番組の「兼高かおるの世界の旅」を毎週日曜日の朝に見ており、私も楽しみにしていました。兼高かおるさんのなんとも言えない上品な話し方やあでやかな服装の一方、海外の色々なところへどんどん入り込んで旅をして現地の生活をレポートする内容に、「自分の知らない地球のどこかに色々な暮らしをしている人がいるんだ。」とワクワクして見ていました。母方の祖母は映画が好きで、夏休みや冬休みに帰省するといつも映画館に連れて行ってくれました。祖母の家では、「今夜は洋画見よか？」と言って、水曜・金曜・日曜ロードショーの映画を見せてくれ、実家ではできない夜更かしをして映画を見ることができ、大人になった気分になっていました。こんな風に小学生の頃から海外に憧れを抱いていたものの、勉強嫌いの私は海外に行くための特別な努力もせず、銀行を辞めるきっかけもつかめなままでした。英語の成績もいつもクラスでは下から数えた方が早い位置におり、海外に行きたい憧れはあっても夢のようなものでした。そして仕事で悶々としていた時、当時付き合っていた今の妻から「協力隊、一緒に受けてみない？」と誘われました。あまりにも突然の提案で、正直とまどいました。果たして仕事に不満を持っている私のこと考えて言ってくれているのか、それとも妻自身のことを考えて私を置いて一人海外に行こうとしているのか、よくわかりませんでした。妻の前では、原則イエスマンの私は試験を受けることにしました。ただ、このきっかけが私の人生の大きな転機になったと思います。試験の日が近づいてきても、私の自分に甘く、ちゃらんぼらん性格は急に変わるわけもなく、仕事が忙しい事を言い訳に何の試験準備もせず、願書も妻に頼んで代筆して提出してもらったままです。

それにも関わらず、試験になぜか合格し、とんとん拍子で派遣されることとなりました。一方、競争率の高い日本語教師の職種で試験を受けた妻は指導歴がなかったことから不合格となりましたが、妻は自身のことはさておいて、「せっかくのチャンスだから、頑張る！」と私を励まし後押ししてくれたことに、今でも感謝しています。

長々と自分の話になりましたが、私が住んでいたマレクラ島は、私の住んでいた官舎があったラカトロとノルスープと言う地区だけ朝の 8:00 から夜の 20:00 まで発電機で電気が供給されていました。そのエリアには、小さな警察と病院、そして、雑貨屋とレストランがそれぞれ 1 軒ありました。当時、淡路島くらいの大きさのマレクラ島には、2 万人の人口が点在していましたが、この地区の 30 家族のみが電気を使える状況で、それ以外の地域は電気・ガス・水道の設備はありませんでした。

私が住んでいた家の横には大きなマンゴーの木があり、実がなる頃には近所の子も達が裸足で木に裸足で登り、木の上から下に向かってもぎ取ったマンゴーを次々と投げつけていました。



子ども達はいつも集まって来てくれました。



擦ったヤマイモをバナナの皮で巻き、石で蒸したラブラブは、とてもおいしい。みんなで囲んで、食事をします。

子ども達は二つのグループに分かれ、小学校の高学年の子ども達は木に登り、下でスタンバイしている低学年の子ども達は、ドンゴロス（クッション代わり）を持って構えて受け取りを集めるという役割でした。彼らは、そのマンゴーを私にもいつも分けてくれました。子ども達は私を見ると島に住む数少ない外国人で現地語を話せたことからか、いつも駆け寄ってきてくれ話をしたり、一緒に遊んだりしました。日本にいた頃、そのような経験が無かった私にとって、自分は彼らのヒーローになったような気がして、とても心地よいものでした。仕事が休みの日には、警察官をしている近くのヴァヌアツ人家族と家から10分位の海までピクニックに良く行きました。海は真っ青なエメラルドブルーで、旅行者も来ないような島だったので、いつもビーチには我々だけでした。ピクニックのおかずの一部は現地調達。5人の父親となる警察官は、海に潜り魚やエビを採り、それを皆に焼いてくれるという、今で言うスーパーイクメンのような人でした。自分は、先進国の日本から高価な物を身にまとはるばるヴァヌアツに来たと偉そうにしている、それは自分自身の力で形作ったものでも何でもなく、ヴァヌアツのような大自然の環境の中で、生きる力をつけて生活する人々の前では、自分はなんてひ弱な人間だと感じる事が良くありました。日本と比較すると電気やガスもない環境でしたが、みんな生活する能力を身に着け、お互いを助け合って生きていく、その姿に自分自身の生活や生き方を省みる貴重な機会となりました。

当時、首都のポートヴィラに South Pacific 大学の分校があり、そこで日本語を教えている協力隊の女性隊員がいました。彼女の日本語教師の仕事の話を聞いて関心が湧いた私は、彼女の授業を見せて貰いに行きました。そこにいた当時のヴァヌアツ人の学生たちは、遠い日本の国に行くことも、日本人と話す機会もほとんどないかも知れないに関わらず、とても勉強熱心で言葉自体を学ぶことを楽しんでいました。私は、その頃も英語を話すのは下手でしたが、日本人が一人もいないマレクラ島の生活で現地語のヴィスマラ語は不自由なく使えるようになり、コミュニケーションをとることの楽しさを感じていました。そして、その頃からあれだけ苦手だった英語の勉強も苦にならなくなり、学ぶことの楽しさを感じることができるようになりました。同時に、自分もいつか日本語を教えてみたいと思うようになりました。

ヴァヌアツから日本に帰国して妻と結婚し、JICA(国際協力機構)の仕事を受け負い、フィリピンに家族で赴任しました。帰国後、妻は子育てをしながら勉強をして日本語教師の講座を終え、日本語を教え始めた頃、時折、妻の授業の話を聞くことができました。私も、その妻の姿を傍らに見ながら妻の応援を得て、35歳でアメリカに家族で留学することができました。その留学が直接現在の仕事に役に立ったかどうかは別として、自分が勉強したかったこと、それとあれだけ苦手だった英語を少しでも克服できたことは自分の中で自信となりました(今も英会話は、たどたどしいですが)。

50歳を過ぎて今の仕事にも少し余裕ができ、ヴァヌアツにいた頃に思っていた日本語教師の勉強を週末を利用して始めました。妻を見ていると、日本語教育能力検定試験に合格することが全てでは無いと感じていましたが、自分にとっては一つの目標として受験することにしました。当初全く歯が立たなかった試験も、良い先生に出会う事ができ、4回目にして合格することができたと同時に、この期間を通して日本語に集中して勉強することで、日本語のおもしろさも感じる事ができました。

今は、オリーブの会で一から日本語を教える機会を得て、自分の力不足を感じると共に、教える喜びと生徒から教えられる喜びも感じています。自分ができる範囲で、焦らず、彼らが日本に来て良かったと思って貰えるように頑張っていきたいと思っております。皆さん宜しくお願いします。





先月の活動（1月）



今月の予定（2月）



|       |         |         |  |
|-------|---------|---------|--|
| 日本語教室 |         |         |  |
| 1/7   | 1/14(M) | 1/28(M) |  |

|       |     |         |      |
|-------|-----|---------|------|
| 日本語教室 |     |         |      |
| 2/4   | 新年会 | 2/18(M) | 2/25 |



参加人数（10月）

|    |     |      |      |
|----|-----|------|------|
|    | 1/7 | 1/14 | 1/28 |
| 生徒 | 15  | 23   | 18   |
| 先生 | 20  | 26   | 18   |



会員の動き

〈退会〉 無し  
 〈入会〉 無し  
 〈休会〉 無し

KIFA国際理解部会 講演会  
 いろんな国で活躍する日本人！  
 ～ラオス人民民主共和国編



日時:2/17(金)18:30～20:00  
 場所:キラリエ草津 501会議室  
 (草津市大路2丁目1-35)

ラオスはどんな国？ どんな活動をしていたの？  
 コロナの影響は？ 日本とのつながりは？  
 などの質問に JICA海外協力隊員として  
 ラオスで2年間活動された樋口愛実さんが教えて  
 くれます。  
 ぜひご参加ください！！

参加費:無料

定員:30人

講師:樋口愛実 氏

JICA海外協力隊2018年度3次隊/2021年度9次隊

申込/問い合わせ先:草津市国際交流協会(KIFA)

Email: [kifa-japan@coda.ocn.ne.jp](mailto:kifa-japan@coda.ocn.ne.jp)

電話:077-561-2322



### 編集後記

2023年です。 本年もよろしくお祈いします。

皆様、2022年は戦争が起きたり、物流がえらいこっちゃになったりでてんやわんやでした。わたくしの仕事は物流の影響をもろ受けるので、2022年はつらかった...・

船舶にしろ航空機にしろ、リアルタイムで動いている物流をトレースできるサイトがあります。毎日それを確認しながら貨物の状況を確認してました。

ロシアの上空は見事なほどに関係国の飛行機しか飛んでないのですね～。

広大な空を各国の飛行機が制限無く飛べれば、物流費も上がらず時間もかからずでよいのになあ。

今年は何の憂いもなく「フライトアウェア」を見つつ、旅行の空想を楽しみたいなあ。

ナカミゾ